

「柳生新陰流」の剣の達人であり、時代劇のヒーロー・柳生十兵衛の父である柳生宗矩についての内容。徳川幕府の安定に大きな役割を果たし、230年あまり続く太平の世を創り出す。そこには、理想と現実の狭間で葛藤した宗矩の生涯が大きく影響していた。没落した柳生家の跡取りだった宗矩は、徳川家康に見出される。剣術で仕えればばかり思っていた宗矩だったが、徳川の敵を倒すため、忍者さながらの諜報仕事を担わされる。親族や門弟を諸国の大名のもとへ剣術指南として送り込み、情報を収集する宗矩。しかし幕府の命じるままに任務を果たしたために、友をあざむき死に追いやるといふ悲痛な体験に宗矩は襲われてしまう。

苦悩した宗矩は、盟友の禅僧・沢庵や3代将軍となる徳川家光と出会う。

そして、徳川政権成立後も続いた豊臣恩顧の大名との合戦に苦しむ庶民を救う「活人剣」の思想に開眼していく。宗矩を剣の師として慕う家光を通じて戦乱の無い世を実現するため、再び非情の諜報に身を投じるが、ついに武家諸法度の改訂によって幕府安定の礎を固める。

剣豪・柳生宗矩の太平の世を求めた、知られざる苦闘の人生が描かれていた。

◇宗矩への沢庵の言葉◇

「それは心を動かさぬことである。 向かってくる相手一人一人に心を動かしては やがて防ぎきれずに斬られてしまう。 いっさい心をとどめず受け流すこと。 このこだわらぬ心こそ 動かぬ心だ」

沢庵が記した「不動智神妙録」より引用し意識しました。

◇宗矩への家光の書状の言葉◇

「私は剣を遊びで習おうとは思っていない」 「剣についてもっと私が満足するように教えてくれ」

この時期に書かれた徳川家光の柳生宗矩あて書状より意識し引用しました。

◇宗矩が残した言葉◇

「悪を殺してあまたの人びとを活かす。 それができれば人を殺すための刀も 人を活かす剣になるはずだ」
「世の動きを見て、乱れそうになったら乱れる前に手を打つ」

宗矩の記した「兵法家伝書」より引用し意識しました。

◇家光の言葉◇

「吾 天下統御の道は宗矩に学びたり」 「徳川実紀」より引用しました。

◇柳生家の家紋「二蓋笠」について◇

この家紋は「柳生笠」「二枚笠」などと呼ばれることもありますが、柳生家では「二蓋笠(にがいがさ)」と呼称されている。



◇最後に宗矩の言葉◇

「こうしようとひとすじに思う心こそ、人が誰しも抱える病である。

この病を必ず治そうというこだわりもまた病である。

自然体でいること、それが剣の道にかなう、本当にこの病を直すということなのである」

宗矩の記した「兵法家伝書」より引用し意識しました。